

令和3年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ・いもち病（No. 6）

令和3年8月11日
鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

中生品種が出穂を迎える時期となっている。8月10日現在、穂いもちの伝染源となる葉いもちの広域発生は認められていないが、穂いもちは発生後の防除が困難であることから、穂ばらみ期及び穂揃い期の予防防除を徹底する必要がある。また、気象庁の7日間予報によると、曇雨天が続くことが予想されているため、雨の止み間に薬剤散布を行う等、防除適期を失しないようにする。

2 発生状況等

- (1) 7月30日現在、県全体の葉いもち発生ほ場率は6.0%（平年：15.9%）と平年よりやや低く、広域発生には至っていない。しかし、一部の常発地等では発生が認められており、気象予報から今後の病勢の復活が予想される。
- (2) 穂肥の施用により葉色が濃くなり、いもち病の感受性が高まっている。
- (3) プラスタムによる葉いもちの感染好適条件又は準感染好適条件は、8月4～10日の期間は広域で出現していない（表1）。

表1 プラスタムによる感染好適日の出現状況

日付	鳥取	青谷	岩井	智頭	倉吉	塩津	米子	境	茶屋
8/4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8/5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8/6	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8/7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8/8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8/9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8/10	—	—	—	○	—	—	—	—	—

注) ●感染好適日、○準感染好適日

- (4) 8月5日発表の向こう1ヶ月の気象予報によると、平年に比べ晴れの日が少なくと予想されており、穂いもちの発生に助長的である。山間地等の常発地や葉いもち多発生ほ場及びその周辺ほ場では、今後も注意が必要である。また、8月11日11時発表の向こう7日間予報によると、曇雨天が続くことが予想されているため、防除時期を失しないようにする。

3 防除上注意すべき事項

- (1) 葉いもちは穂いもちの伝染源となるため、葉いもちの進展が止まっていないほ場では、治療効果を有する粉剤、水和剤などを用いて葉いもち防除を行う。なお、上位葉で病斑が認められていなくても、下位葉の病斑で孢子形成している場合があるため、ほ場を注意深く観察する。
- (2) 穂いもちは発生後の防除が困難であるため、穂ばらみ期及び穂揃い期の2回

防除を徹底する。薬剤は、いもち病単剤またはこれらを含む混合剤の粉剤、水和剤などを用いる。なお、降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。

この場合、散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある。

- (3) まだ出穂していないほ場で、穂いもち防除を目的として粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して、出穂前の所定の時期に湛水散布する。この際、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める。
- (4) 上位葉における発病が多く、穂いもちの多発生が予想される場合は、傾穂期（穂揃い期の7～10日後）の防除を追加する。
- (5) 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などのいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。
- (6) 平成30年からストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場およびその周辺ほ場における使用を控える。
- (7) 防除に当たっては、農薬の使用基準を遵守するとともに、使用上の注意事項を守り、散布作業者の安全の確保に努める。特に、葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもちの防除薬剤を選択する。